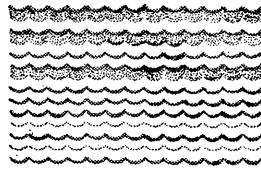


公園にて

田中三保子



休みの日の午後は、2才の息子とよく近所の小さな公園に出かける。その公園は、ちょっと奥まった新興住宅地の中の、新たに宅地造成された一画にある。

その日は冬には珍らしく穏やかな暖かい日で、公園にはすでに子どもたちがたくさん来て遊んでいた。

珍らしく女性の姿があった。その人はベンチに腰かけて本を読んでいたが、時折目をあげては大きな声をあげた。「あっくん」という呼びかけがしばしばはいるので誰かの母親らしかったけれど、はじめのうちは子どもと母親がなかなか結びつかなかった。ベンチに座ったままで少しも動こうとしなかったせいかもしれない。「あっくん」と呼ばれた子(や

つとわかった、4才ぐらいの男児は同年令とみえる女の子とあれこれ遊んでいたが、やがて連れ立って砂場にやってきた。

砂遊びを始めるとまもなく、あっくんは女の子の使っていたふるいを持ってしまった。女の子が泣き出すと、向こうから「あっくん、やめなさい。返しなさい」と声がかかる。それは全く、文字通り有無を言わせないとといった感じの命令口調だった。でも、あっくんはまるで聞こえないかのようにふるいに砂を入れている。「ゴークルフアイブ買ってあげないわよ」と言われても、あっくんは動じる様子を見せない。とうとう母親は砂場までやってきた。そしてもう一度、強く、「そんなことをするとゴークルフアイブ買ってあげないからね」と言った。あっくんは「あーん」とすねたような声を出したが、それでもふるいは手離さなかった。

ふるいを持っていない方のあっくんの右手は、ちようど砂場のふちを押さえる形となっていた。そこ

まで来た母親は、あっくんのその右手に自分の右足を重ねる真似をした。それから極めて冷静な調子で「返しなさい。返さないと痛いわよ」と言った。

さすがのあっくんもふるいを手離して、母親に促されて「ごめんなさい」と言った。母親は満足したようにベンチに戻ると再び本を読み始めたが、程なく一人で帰っていった。すぐさま女の子がまた泣いて「おばちゃん」と叫んだ。あっくんは今度はバケツを持っていかれてしまって、母親に訴えているつもりだった。泣き声など耳にはいらぬようなあっくんの様子に、私は使っていなかった息子のバケツを貸して、女の子に返してくれるよう頼んでみた。はじめは無視されたが、二度三度頼むと応じてくれ、ふたりはまた一緒に遊び出した。

そんな出来事があった後、私はずっとあっくんの母親のことが気になってしかたがなかった。親という立場だけでどうしてあんなにいばれるのだろうか。親の論理をあんなに一方的に力で押しつけるこ

とができ、しかもそれが自信に満ちているのが、私には不思議でならなかった。実に冷静に子どもに命令し、屈服させ、そのことに何の踏いも感じていないように堂々として見えたのは私だけだろうか。

その公園へ冬の風の冷たい日に出かけていった時のこと、さすがに人影はなかった。息子と砂遊びをしていると、大分経って、5才ぐらいの男児が2人走ってきて砂場の向こう端で遊び始めた。30分ばかりすると、ひとりの子の祖母と思われる人が迎えに来た。「もう4時だから帰りなさい。約束でしょう」と強く言ったが、その子は「やだ。帰らない」と頑張った。

川を掘り、水を流しはじめたばかりでまだ遊び足りないのであらうか、「帰りなさい」といくら言われても、「帰らないの」を繰り返していた。おばあちゃんはあきらめてしばしおつき合いをする気にな

ったらしく、自分も棒切れで川を掘り始めた。その子は水を汲んできてはジャーと流していたが、その水がまともに自分の脚にかかってしまった。寒いせいもあってちょっとペソをかくと、おばあちゃんはなじるように言った。「ほら、ちゃんと見てないんだから。どうしていつもあんたはこうなの」。そして「拭いてあげないよ」とも言った。

その子はちょっとした間ベそをかいていたが、気がとり直すと水汲みを続けた。おばあちゃんは立ちあがると、「もういいでしょ。帰りなさい」と再び帰らせようとはじめた。その子はとうとう泣き出してしまったが、そこを動こうという様子は見せなかった。一緒に遊んでいた子は、はらはらした様子で成りゆきを見守っている。業を煮やしたおばあちゃん「もう迎えに来ないからね」と言い捨てたが、効果はなかった。その子がちっとも言うことをきかないので、おばあちゃんはいらいらした様子で「もう誰も迎えに来てやらないからね」と、もう一度念

を押した。それでもこたえないとわかると、「帰ってきてもうちに入れてあげないよ。もうはいれないからね」と最後のだめ押しをして帰っていつてしまった。とり残されて泣きじゃくるその子を、もうひとりがしきりになぐさめていた。その後、母親が迎えに来て、彼はしおらしく帰っていき、私も一応ほったした。

おばあちゃんの、孫に対するものとは思えないような容赦のない態度に、私はたまたも脅かされた。何としてもおとなに従わせたいという気持の表われなのかもしれないけれど、それにしても、相手が幼児にしては何と恐ろしい物言いなのだろう。約束の時間に戻ってほしいというおとなの基準（これはしばしば一方的である）に従属させることしか思いつかないのだろうか。従順であることが好ましいこと

で、そうでなければ罰せられても当然と理解しているのだろうか。子どもにだって小さければ小さいなりの感情も理屈も合理性も必然性も（そしてほんのちよっとのわがままも）あって、私などは（情けないことにとというべきか）毎日、我が子とどこで折り合おうかと否応なしに探り合っている。

親であることは、もうそれ自体で子どもに対しては絶対的権力者の位置を占める。たとえ親の論理を押しつけて子どもがそれに従ったとしても、子どもは力に屈服しているにすぎないのではないか。そのとき行なわれている行為を考えてみると、抵抗する手だても考えつかない子どもを弱い者いじめしていることになりはしないだろうか。社会問題として言われている「弱い者いじめ」の原型（あるいは植え付け）が、こういう形で培われているような気がしてならないのは私だけであろうか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）